

キリスト教教育と人物史

佐々木勝彦

I 「自ら学び続ける教師」

聖書科およびキリスト教学の教科書をみると、何らかの形で「人物史あるいはその類似の形式」が採用されています。これは、中高生のみならず大学生にとって、「人物史」の形式が教育実践上有効であるとみなされているためと思われます。このことをふまえて、今日は「人物史」の問題について考えてみましょう。

一般に、キリスト教教育に「人物史」を取り入れる理由は、それが生徒や学生にとって「分かりやすい」からとされています。また最近では、「物語の神学」等の影響などもあり、聖書の中心的使信がそもそも「物語」の形式で伝えられていることから、それをキリスト教教育の実践にも適用しようとする試みもなされています。今回は、これらのアプローチに加えて、「聖書科教師の養成あるいは成長」のために、という視点を加えてみたいと思います。このことに思い至ったのは、大学の宗教科教員免許状取得に関わる教科教育法の授業を担当していたときでした。「独学する教師」というイメージが湧いてきたのです。キリスト教教育の実践には、どうしても「自ら学び続ける教師」が必要不可欠になります。

数年間も教えると、誰でも教材の選択にそれほど苦しまなくなります。生徒や学生と教師の知識の差は歴然としており、その差はますます広がって行くからです。ところがこれが落とし穴であることは、教師であれば誰もが承知している通りです。では、これを乗り越えるにはどうすればよいのでしょうか。わたしにも名案はありません。しかしもし「自ら学び続ける教師」が生まれるならば、おのずから「マンネリ化」は避けられるはずです。楽観的すぎるでしょうか。教師自らが再び、探求する喜びを味わうとき、教師の姿勢は内側から変わらざるをえなくなります——もちろん、そのための時間がないから苦しんでいるのだ、との現場の声も十分承知しています。

教科教育法のある授業では、何人かの人物を取り上げ、各自がその人物について「物

語る」という課題を与えています。いずれの場合にも、まず最初に自分でその人物の略年史を作らせませす。学生にとってこれは「楽勝問題」です。インターネット等で検索すれば、必要な情報は簡単に入手できるからです。課題を出した次の週に、各自の答えを突き合わせると、その情報源も直ちに判明します。そしてさらに、一人ひとりに、その手持ちの原稿を見ずに当該の人物を紹介するように指示します。その結果は、皆さんの想像する通りで、全滅です。しかしここからようやく本題に入ることができませす。自分で調べなければ、自信をもって語ることはできませす。一学期は十五週からなっており、彼らの略年史が出来上がるのは、授業もその半分を過ぎる頃です。そのため一学期に取り上げることができるのは、せいぜい二、三名です。

II 「神谷美恵子の生涯」

講義において彼女の生涯を取り上げるのは今回が初めてです。そのきっかけとなったのは、別紙にある「総合人文学科 第一回 研修会」の講演の依頼でした。これまで「キリスト教学科」の学生が相手であり、キリスト教を前面に出して語ることができました。今度の学生は、ほとんどキリスト教を知りませす。まるで聖書科やキリスト教学のような授業をしなければなりません。現在では、キリスト者でなくとも、宗教科の教員免許状を取得することができませす。

総合人文学科の学生は、他の学科の学生と異なり、全員が卒業論文の提出を義務づけられています。したがって早い時期に、自らの専攻を限定しなければなりません。「あれも、これも」ではなく、「あれか、これか」を決断しなければなりません。このことを考えているうちに「神谷美恵子」の名前が浮かんできました。彼女の生涯は、この問題に苦しんだ一生でもあるからです。それにしても、現在の高校生はどのようにして、進学する学部・学科を選択しているのでしょうか。「あれも、これも」と悩んでいると思うのですが。

彼女の生涯を取り上げることを決めたあと、最初に行ったのはあの「略年史」作りです。彼女の書物を読むのは三十三年ぶりであり、よく調べてみると、著作集十巻の他に別巻二冊と詩集もあることが分かりました。その上、翻訳書にも目を通すとなると、かなりまとまった時間が必要になります。とりあえず彼女に関する研究書を探すことは後回しにし、第一次資料の読解に集中することにしました。

数ヶ月間の悪戦苦闘の結果、彼女について次のようなイメージがまとまりました。

① 公刊された日記および書簡集は、かなり限定された期間と内容のものであり、注意して読む必要があります。大部分はまだ未公開であり、それらの公開によりそのイメージも変わる可能性があります。②『遍歴』は彼女自身が書いた自伝であり、しかもそれは他界する一週間前に（一九七九年十月十五日）に出版社に送られています。本来「自伝」はいずれも、著者がそれをまとめた時点での自己評価であり、同一の出来事に対する別の自己評価もありえたことに留意しなければなりません。③『生きがいについて』（一九六六）の第一回草稿はすでに一九六一年に書きあげられており、それは大阪大学より医学博士の学位を授与された翌年にあたります。つまりそれは、客観的研究を前提とした主体的研究です。④ 彼女の宗教観を問う際には、資料の年代に留意し、その背景を検討する必要があります。⑤ 彼女は「ヘブライズムとヘレニズム」の緊張関係を承知しており、彼女のギリシア文学への傾倒もこの関連で検討する余地があります。彼女の周りにあったキリスト教はいずれも「組織」に対するアレルギーと「あれか、これか」を強調する傾向をもっていました。⑥ 彼女にはカイロス体験に近いものがあります。しかし、その中で同時に明らかになるはずの自己理解は漠然としたままであり、これが「表現欲求」となって現れている可能性があります。つまり、闇が闇であるためには、光の存在が不可欠であり、しかもその光は二項対立の一方であると同時にそれを超越していることに対する洞察がまだ漠然としています。⑦ たしかに彼女は、ハンセン病患者との出会いを「病人が私を待っている」と表現し、長島愛生園の仕事に就くまで、「若き日からのらいへの負い目」を感じ続けました。しかしこの負い目を若き日の「喪失体験」の補償と理解するのか、それともより深い実存的経験の自己表現と理解するのか。その理解は、宗教的感覚一般に対する評価によってかなり左右されます。⑧ 資料には、戦争に対する直接的批判が見あたらず、ハンセン病患者の隔離が「人権侵害」にあたる差別であるとの意識も見られません。また女性医が、この隔離政策の負の面を覆い隠すために利用されたとの認識も見られなく、これを社会意識の未成熟の結果と解するのか、それとも「ストア的」発想の帰結とみなすのか。あるいはさらに別の理由があるのか。熟考する必要があります。⑨ 前項の問題があるにもかかわらず、彼女の中には強い「歴史意識」があり、文学、哲学のみならず精神医学をも歴史的視点から捉えています。晩年には自らの歴史意識と対立するフーコーの構造主義をいち早く紹介し、それと批判的に対峙しています。「歴史意識」は相対的視点をもたらすはずであり、この相対性に対する砦となったのが彼女の自然・宇宙神秘主義である可能性があります。⑩ 彼女の時代

はまだ「若者の時代」でしたが、彼女は、自らが目の当たりにした「病者の死」「人生の秋」「老人の死」の問題を突きつけています。そしてキリスト教はこれらの問題に対して無力である、と批判しています。彼女の中には、キリスト教＝「人間中心主義」という神話が生きており、この認識が彼女の「自然への回帰」の神話を支えています。これらの点について、現代神学の観点から丁寧に反論しておく必要があります。

このように彼女には多様な側面みられ、「詩人」としての顔も忘れてはなりません。その詩は自然神秘主義的傾向を感じさせます。また、彼女はバッハの音楽の愛好者であり、ピアノもよく弾きました。日記を読むかぎり、文学か医学かといった悩みの中でも、バッハの音楽に対する思いは深く、それはゴシック建築に例えられています。つまり感性的であるだけでなく理知的であることと、「死への希求」（『往復書簡集』一一二頁）に惹かれているようです。したがって彼女の神秘主義的傾向について語る際にも、パスカルの場合と同様に、幾何学的精神との両立と死の問題についても検討する必要があります。普通の医師ではなく、精神科医となったことに、彼女はこの両者の緊張関係の総合を感じているようです。

さて、以上のような彼女の生涯について語るとして、略年史の次に何をどうすればよいのでしょうか。わたしの場合は、大学生が相手なので、その著作集からいくつかのテキストを抜き出し、解説する方法も可能だと考えています。難しいのは、どの部分を抜き出すかということです。あらかじめこちらの問題意識を絞っておく必要があります。例えば、次のような視点はどうでしょうか。① 幼年期のトラウマに近い経験。できれば、彼女の「こころの発達段階」論と共に。② 「ハンセン病患者」との出会い。③ 闘病体験とその克服。④ アメリカでの方向転換と友人との出会い。⑤ 精神医学という選択。⑥ 家庭と仕事の両立。⑥ 教師と医師の両立。⑦ 「人間を越えるもの」への信頼。その根拠は？ ⑧ 執筆者と翻訳家の相克——執筆者（『生きがいについて』『人間をみつめて』『こころの旅』『遍歴』）であることと、翻訳者（マルクス・アウレリウス『自省録』、ジルボーク『医学的心理学史』、フーコー『臨床医学の誕生』『神経疾患と心理学』、ヴァージニア・ウルフ『ある作家の日記』）であることとの相克。

最後に、神谷美恵子の生涯はキリスト教教育の教材としてふさわしいのかどうか、改めて考えてみましょう。というのは、もしも間違いなく適切だとしたら、わたしはすでに実践していたはずだからです。心のどこかで抵抗を感じていたのです。彼女の宗教観は、それが彼女の内にとどまっているかぎり、さほど問題にならないとしても、いずれ学習者のうちに混乱を引き起こしかねないと感じていたからです。神谷美恵子

の自覚とは無関係に、彼女の宗教意識は日本人の極めて伝統的な宗教意識と共鳴し、さらにはそれを下支えする可能性が強いからです。彼女の内に見られる組織に対する嫌悪感は、宗教を「心の問題」として捉える発想に通じ、これもやがて社会の現状肯定論に利用されて行く危険性があります。この危険性を十分に認識しつつ紹介する必要があります。彼女の結論はわたしたちの結論ではなく、むしろ序論にすぎないことをはっきりと語るができなければなりません。

心の発達段階のある時点までは、根本主義的方法論の直接的適用も可能である、とわたしは考えています。小学一年生の「身の安全」を守るには、横断歩道の信号は「三色」ではなく、「二色」であると教える方が有効です。その場合、「黄色」は「赤」を意味するため、飛び出しによる事故は減るはずだからです。しかし大人には「黄色」が必要です。それにより、自ら判断し、決断する自由が保証されるからです。神谷美恵子の生涯は、「あれか、これか」ではなく、「あれも、これも」の世界です。したがって教える対象の年齢が問題になります。いわばそれは「黄色」のある世界です。彼女の生涯を、マーティン・ルーサー・キングやマザー・テレサの生涯のように教えることはできません。教育する側に、この違いに関する明確な認識と責任意識が伴わない場合は、やめた方がよいでしょう。しかしこの危険な領域にチャレンジすることは、きっと教師のうちに新たな「はり」を生み出すはずです。

(総合人文学科・教授)